

あばれ獅子

—厄払い—

獅子舞については、千万町神楽（嫁獅子神楽）に見られるような獅子舞がよく知られていますが、今回は、「あばれ獅子」といわれる獅子舞ではない獅子の登場する祭りをご紹介します。

「あばれ獅子」が登場するのは、中金町日吉神社祭礼（昨年は、一〇月一日）の時です。祭礼は、一〇時開始で、祝詞、浦安の舞、玉串奉奠などが行われ、一時頃には総拜し終了します。その後、午前中に整えられた矢場では、金的が用意され、その的を射る様子を見ることができ、金的的中すると金的が奉納され、神輿準備が行われます。花火が二発打ち上げられ、午後二時に神輿が、若宮社に向けて出発します。

神輿渡御の際に、「あばれ獅子」が登場してきます。又サ（木の棒の先に紙垂をつけたもの）で、子どもの頭を叩いて、走り回る光景が見られます。以前は、若い衆を「あばれ獅子」が追っ掛け回し、思いつきり叩くという光景も見られたそうですが、現在は、とても優しく撫でるような感じでした。叩かれると縁起がよい、厄払いにな



又サで頭を撫でているところ

る、ご利益があるなどと言われている、お母さんに抱かれた、二歳ぐらいの子どもの緊張した面持ちが印象的でした。

道行では、お囃子も披露されます。お囃子の曲目は、ミヤデ、ミチユキ（二曲）、ハヤビヨウシ、ミヤイリの四曲です。お囃子も含め、この「あばれ獅子」は、保存会が中心となって、若い世代への継承に努力しています。毎日の練習にも自然と力が入るようです。

このように、伝統が代々引き継がれている姿は、その地域の力を印象深いものにしてくれます。また同時に、未来が頼もしく感じられるものです。祭りには、そんな魅力があります。

図書館交流プラザ岡崎むかし館主任専門員

野本 欽也

肺癌の治療

癌は日本の死亡原因の第1位です。その中で最も多いのは、1998年から肺癌となつていきます。肺癌は早期に発見されにくい病気の一つです。そのため、進行した肺癌で手術できない場合があります。このような時には、抗癌剤による治療（化学療法）が中心となります。

肺癌の化学療法は、肺癌の種類によって「小細胞肺癌」と「非小細胞肺癌」の二つに大きく分けられます。中でも「非小細胞肺癌」の化学療法は大きな変貌を遂げています。「非小細胞肺癌」の中には腺癌、大細胞癌、扁平上皮癌という種類があります。従来の化学療法はこれらを区別なく行うことが一般的でしたが、近年は癌細胞の型により治療薬を選択するようになってきました。

昨年、「非小細胞肺癌」の中で腺癌、大細胞癌に対し有効性の高い2種類の薬が新たに日本で使える

ようになりました。癌細胞の代謝を阻害する薬と、癌の成長や転移に必要な血管の新生を阻害する薬です。また、肺癌患者さんの中には上皮成長因子受容体（EGFR）遺伝子という癌遺伝子に異常のあるかたがいます（約3割）。これを有するかたには、その阻害剤が多

くの場合で非常によく効きます。このようにそれぞれの肺癌の型に合った治療法の開発が進んできており、今後さらに新たな化学療法の開発も期待できます。岡崎市民病院では肺癌に対して積極的に新しい化学療法を取り入れ、常に最新の治療法を提供するよう努めています。

岡崎市民病院 呼吸器内科

統括部長 安藤 隆之

部長 田中 繁

市民病院を受診する際は「かかりつけ医」の紹介状をお持ちください。